

金聖歎の水滸傳

松枝, 茂夫

<https://doi.org/10.15017/2556530>

出版情報 : 文學研究. 35, pp.181-196, 1946-03-30. 九州文學會
バージョン :
権利関係 :



金聖歎の水滸傳

松 枝 茂 夫

「ドンキホーテはセルベンテス書いたのではなく、後世が書いたのだといふ言ひ方があるさうだが、支那の小説も大抵その流儀で片付けられるやうだ。水滸傳はたしかに施耐菴や羅貫中の作といふよりは、金聖歎が書いたといつた方が本當に近い。」私は曾つてさう書いた。その意味を聊か敷衍説明しようとするのか本稿の目的である。

水滸傳は元の時代にはなほ書物の形を成してゐなかつた。元代における水滸劇相互間に見られる矛盾混亂は十分それを證明してゐる。狩野君山博士はこの理由から「或は水滸傳の前に恐らく幾多の小水滸傳があつて、そ

れが段々に積かさねられて、後に今日見るとき水滸傳になつたのであらう」(「水滸傳と支那戯曲」、支那學文叢所收)といはれ、水滸傳成書の年代を元末以後に引下げてをられる。この假説は後に胡適によつて裏書せられ、水滸傳の成書年代は更に明の中葉以後にまで引下げられた。(「水滸傳考證」)

雪達摩が轉がるに隨つて大きくなるやうに、水滸傳も時代と共に大きくなり、完成されて行つた。それは宋以來幾百年に亘つての、幾多無名の大衆藝術家達の努力の集積なのである。由來水滸傳の作者に就いては、或は「羅貫中編輯」といひ(百十五回本)、或は「施耐菴集撰、羅

貫中纂修」といひ(百二十回本)、或は「施耐菴撰」といひ(七十回本)、これを施羅二人に歸するのが常識となつてゐるけれども、實はこの二人は水滸傳の生成發展途上に於けるチキストの記録者、整理編纂者として、比較的大きな功績を残したといふに過ぎないのではないか。施耐菴が水滸傳を作るとき、三十六人の畫像を描いて壁に張り、日に之を眺望す、故にその人物躍々生くるが如しといふ傳説などは、どこまで信用してよいか、甚だ疑問だらう。水滸傳の著作權は、これを施羅二人の獨占に歸せしむるよりは、むしろ無數の名も無き支那民衆の手に歸せしむることの遙かに正當なるを私は信ずる。

いづれにしても水滸傳は長い年月の間に、無數の人の口から口へ語りつぎ言ひつがれ、無數の人の手で書きとめられ、書き改められ、書き加へられて、明の萬曆頃までに一應の完成を見たのである。それは各種の百回本にせよ、百二十回本にせよ、いづれも「忠義」の名を冠し、

李卓吾先生批評と稱し、或は鍾伯敬先生批點と稱するものを附してゐる。その批評は、中に若干採るべきものもないではないが、又近時に至つてその價値の見直すべきことを主張する人のあるのも私は知つてゐるが、概して云つてあまり精彩ある文字ではない。李氏校書の中に「忠義水滸傳序」が收められてをり、その序文の確かに李卓吾の手に出でたことは信じてよゐとしても、批評文の方はどうであらうか。宣傳價値をねらつた書賣のさかしらであらうと思はれる。李卓吾といひ鍾伯敬といひ、いづれも當時の正統學派からは異端の徒としてげげじのやうに忌み嫌はれ、攻撃非難の槍玉に上つた人達である。しかし一方又その大膽な平等思想、自由主義的行動、尖鋭で犀利で派手で氣の利いた表現によつて、當時のジャーナリズムの寵兒であり大した人氣作家であつたのであるから、射倖の徒がその名聲を利用せずにおかなかつたことは察するに難くない。

最後に出たのが金聖歎批注の七十回本、即ち「第五才子書」と稱し、「貫華堂古本」と銘うつた所の水滸傳である。時は崇禎の末年、明室滅亡の直前であつた。本文は楔子一回、本傳七十回、これこそ施耐菴の原作である、第七十一回以後は羅貫中の續作であつて、とんでもない「惡札」つまり駄作だと爲して之を切り捨てた。さうして之に附するに聖歎の序が三つあり、宋史から水滸關係の部分を抄録した宋史綱及び宋史目があり、金聖歎一流の高飛車な調子で書かれた「水滸傳讀法」があり、また施耐菴の自序まである。最後のものは云ふまでもなく金聖歎のあくまで人を喰つたいたづらである。しかし何といふ奇文、怪文、爽快文であらう。一讀頭がすーつとなる。まことにキビ／＼した目ざましい文章だ。それから本文の方は一字一句の末に至るまで金聖歎の息がかゝつてゐる。くだくだしい詩詞や駢語は悉く之を削り去つた。拙劣な字句は悉く之を刪改した。しかも毎回の初に

各論があり、又文章の一節一句には縦横自在に長短の批評文が夾まれてゐる。文章の解剖は精到を極め、その紙背を抜く眼光には全く驚歎の外ない。短評には「虎一人」「奇文」「第一碗」「哨棒十六」などの如き一字二字三字四字位のもある。これは丁度義太夫語りの三味線弾きが掛聲をかけるやうなもので、これがために本文に勢がついて来る。若し頭から、うるさいといふてのけるならそれ迄であるが、其掛聲が善く調子を外さぬやうに行く處はなか／＼うまいものである。若しかういふ詳しい評の仕方は金聖歎から始まつたとすれば猶更金聖歎は一種の伎倆を備へて居た批評家と目することが出来る。』と正岡子規が云つてゐるが、いかにもその通りである。金聖歎本一たび世に出づるや、忽ち一世を風靡し、在來行はれてゐた百回本や百二十回本の忠義水滸傳は見る見るうちに影を薄くし、いつしか全く市場から驅逐されてしまつた。人は水滸傳とし云へば即ちこの七十回本しか

知らなくなつた。お蔭で今日では水滸傳の版本學者が大骨折つてわからんと云つてをる。

さて、金聖歎とはどんな男か。

聖歎、姓は金、名は人瑞、吳縣の人。(もと張采、字君采といひ、後に金姓に改めたといふ説は誤りらしい。) 生れた年はよくわからぬが、順治十八年(康熙元年)殺された時五十餘歳であつたから、明の萬曆三十年から四十年までの間に生れたと見てよい。先輩李卓吾が通州の獄中で自刃を遂げたのは萬曆三十年の事である。金聖歎はほゞそれと入れ替りにこの世に生れ出てゐるわけである。幼くして家は貧しく、親戚も少かつた。病氣勝ちで孤獨だつた。財奴を痛罵し、友誼を重んずる性格はかうした環境から來てゐよう。

——以下は金聖歎自身が水滸傳自序三で云つてゐるところだから、例によつてどこまで本氣で聞いてよいかわからぬが、彼は十歳のとき郷塾に入り、四書を授けられた

が、一向その良さがわからなかつた。翌年病氣のため退塾、病牀では法華經、ついで離騷を耽讀した。離騷は見慣れぬ字が多くて、好きは好きだがよくわからぬ。わからぬ儘にその一句兩句を記誦した。法華經や史記はずつとわかり易い。しかしそれとて十分讀みなせる程度に至つてをらなかつた。ところが十二のとき水滸傳を讀んだ、それは貫華堂所藏の「古本」である。(貫華堂とは彼の友人韓住字嗣昌の法號である)朝となく夜となく、これを抱いて愛讀し、つひに日夜手鈔し、謬つて自ら評釋し、四五六七八月を歴て事方めて竣る、——即ち水滸傳の批評を以て彼十二歳の時の作と稱してゐるが、勿論これは金聖歎流の物の言ひ方である。自序三の日附は「皇帝崇禎十四年二月十五日」とあるから、まづ三十歳前後の時の作と見てよからう。

やがて明朝が亡びる。彼はこの大變に遇ひ、意を仕進に絶ち、一世の拗ね者として世を白眼視するやうにな

。佛書が好きで、友人に僧が多い。世の講學者流を痛烈に攻撃し、自分の家に高座を設けて佛典の講義をやつた。その經を「聖自覺三昧」と名づけ、稿本は絶對秘密にして人に見せぬ。高座に上るや、ピン／＼と連聲で滔々數百萬言、一切の經史子集、箋疏訓詁、釋道内外の諸典から稗官野史、九彝八蠻に記載する所のもの、何一つとして齒頰に供せられぬはなく、縦横顛倒、しかも一以て之を貫く。座下の緇白四衆は頂禮膜拜して、未曾有と歎じたと廖燕の「金聖歎傳」に云つてゐる。不羈奔放、狂氣じみた才人。極端に反俗的であつた。禮教を無視し、人のやらぬ事を選り好んでやらうとする。ある本に彼は犬の肉をしやぶり乍らお經を講じたと書いてある。中傷の言かも知れぬ。だが「坊主が犬の肉を食つたつて何の悪からう」と水滸の批評に書いてゐる所から見るに、或は隨分やつたかも知れぬ。又好んで政事にわたり、君權を否定するやうな事も言ふし、男女間の色慾の

事に就いても、人の敢ていはぬ所をすば／＼言つてのける。酒はいけなかつたらしい。「金聖歎傳」には飲酒を好むとあるが、まぢがひだ。水滸六十一回の評を見るがよい。自ら下戸であることを告白して殘念がつてゐる。白面のま／＼醉拂ひの言ふやうなことをぬけ／＼吐く所が面白いではないか。唐伯虎以來の吳中名士の傳統たる放誕風流の風氣は、金聖歎に至つて極まつたと云へる。恰も人心騷然たる亂世でもあつた。

順治六年「聖人千案」を書く。これは碧巖錄から二十五則を抄して批注したものだ。つづいて「法華經百問」「法華三昧」「寶鏡三昧」その他多くの著書を書いたが、今は大抵散佚した。順治十三年第六才子書西廂記の批評完成上梓。水滸でやつたのと全く同じ流儀で、一層精彩ある批注を行ふと同時に、草橋驚夢で斷り、第五折は關漢卿の續本であつて悪札であると罵倒、曲文も例によつて自由に改竄を施した。以後西廂記といへば即ちこの第

六才子書を意味するに至るほど持囃され、原本は反つて殆ど行はれなくなつた。

順治十六、七年に杜詩の評を書く。未完で終つてゐる。「杜詩解」四卷、二〇二首。卷三までは若年の頃の作で、卷四は多く順治中に成る。彼は、唐人の詩は多く四句を以て一解となすといふ見解の下に、八句の律詩は悉く之を四句づつに切り、二段に分つて解釋を施す。時に面白いと思はれる場合もないではないが、牽強附會の弊に陥つたのが甚だ多い。唐詩は何の罪あつて之を腰斬に處したかと同時に人から誣られたのも、あながち無理でない。

みんなこの流儀。史を論じては秦始皇の焚書を賛し、文を論じては施耐菴をほめ上げて「天下の文章水滸の右に出づるものなし、聖嘆三千年の中、獨り才子を以て此一人に許す」といひ、そして韓退之をこきおろして「直ちにこれ印刷文字（ヘンで押したやうな文章）、いふに

足らず」といひ、又、字を論じては蒼頡の作つたものでないと斷ずる。又彼は支那文學の中から離騷、莊子、史記、杜詩、水滸、西廂の六種を取つて「聖歎才子書」と名づけ、その批判を試みた。未完に終つたが、その卓越せる文學鑑賞眼は驚くに足る。從來正經の書と見られなかつた戯曲小説を取上げた所は、確かに金聖歎にしてはじめて爲しうるものであつた。

晩年は戸を閉して専ら唐詩の批判を書くのに熱中した。「祥人堂に滿ち、書者腕脱す」といはれてゐることによつて、いかに彼が流行作家であつたかがわかる。しかも彼は衰老病後、すでに日暮れて道遠しの憾みを友人に傳へてゐる。順治十七年、唐詩七言律五百九十五首を二月餘かかつて一氣呵成に「上下快説」し、子の雅といふのに筆記せしめた。そして翌十八年、罪を得て腰斬の刑に處せられる間際まで、その仕事の未完成に拳々の意を致してゐる。

彼が斬罪に處せられた原因は、書生と貧官汚吏との抗争の波に捲き込まれた爲である。いはゆる「哭廟抗糧案」。その前年の十二月、蘇州の知縣となつて着任した任維初なる者が苛斂誅求をほしきまゝにしたので、土地の人々は三尺の童子に至るまで不平を懷いてをつた。十八年二月世祖崩じ、巡撫朱國治以下、幕を設けて哭臨した。同月四日諸生百餘人、文廟に同じく哭し、相從ぶ者千餘人に至り、號呼するうち、つひに任維初に對する不平が爆發して大騒ぎとなつた。巡撫大いに駭き、部下に命じて捕縛せしめたところ、その大部分は逃げ、うち僅かに倪用賓以下十一人だけ捕つた。中央監察官の訊問に對し、巡撫知縣は巧みに罪を諸生に轉嫁した。折悪しく恰も金壇に叛逆事件が起り、鎮江も不穩な情勢に在つたので、その騒ぎの蘇州にまで飛火することを恐れた中央政府は、重罰主義を以て臨むことに決し、右の十一人をく南京に護送せしめた。その際、蘇州府學教授程翼蒼

なるもの、金聖歎と丁子偉の二人をもこれが連累なりと申立てた爲、この二人また南京に送られた。聖歎がかつて衆を糾合して廟に哭し、又「哭廟文」を作つたのが禍をなしたのである。彼等はすべて十八人、それに金壇鎮江の犯人百二十一人、みな叛亂騒擾罪に問はれ、順治十八年七月十三日巳時、南京三山街で斬罪に處せられた。金聖歎の一家は悉く沒收、その妻子は寧古塔に流された。

聖歎が死ぬる前に獄中から妻に宛てた手紙が傳へられてゐる。文は本によつて小異があるが「殺頭至痛也、藉沒至慘也、而聖歎以無意得之、大奇。若朝廷有赦令、猶可相見。不然、死矣。」つひに一笑して刑を受けたといふ。いかにも彼らしい最期である。

このやうな性格をもち、このやうな生涯を送つた。彼の文章は亦實にそれにふさはしい。實にキビ／＼してゐる。秋霜烈日のやうに鋭く人の胸に迫る氣迫がある。あ

くまで反俗的で、凡俗を頭こなしにやつつける。寸鐵人

を殺すやうな生々しい文字を使ひ、人の意表に出でた論法で、人の言ひ得ない又言はうとも思はない事を大膽不敵にズバリ／＼言つてのける。實に痛快だ。「できものか何か出來た時に、門を閉し、自分で熱湯をぶつかけて之を焼きただらせ洗ひながしてしまふのも、亦快ならずや」と彼は云うてをるが、丁度そのやうに金聖歎の文章をよむと、自分が思ひきり罵しられてゐるに拘らず、へんに痛快で面白い。おそろしい魔力を持つた怪文を彼は書いた。中には何とも知れぬ屁理窟も随分あるが、それを博引旁證、滔々幾萬言たてつゞけに一氣呵成に述べ立ててゐるのをよむと、何かよくわからぬ乍らやつぱり面白い。彼は鬼面人を驚かすことが大好きだ。人を馬鹿にしたやうなことをぬけ／＼と書く。ハ、ア又例の手だなと思つて讀むが、やつぱり面白い。前にも云つたが施耐菴の名を以て書いた水滸傳の序は彼の代表的文章といつ

てよい。

ところでその金聖歎は水滸傳をどう取扱つたか。

金聖歎は性格的に、前人の説に異を立てねば我慢の出來ぬ男である。當面の目標は李卓吾本、まづ以てこれを打倒せねばならぬ。その爲に彼は例の「貫華堂古本」と稱する七十回本をでつち上げたのである。そんな古本なんて實際ありはしない。百回本や百廿回本と比較對照してみればすぐわかることだ。當時の人もよく金聖歎のラクリは知つてゐた。周亮工曰く、「最近金聖歎が七十回からは後は羅の續作だと斷じ、そこで口を極めて羅を誣り、また施の序を偽作して前にくつつけた。かくて此書は遂に施の作といふことになつてしまつた。」しかも、金聖歎が周到な注意を以て補綴工事を行つた筈にも拘らず、例へば七十回の最後、盧俊義の悪夢の一段を偽作して巧みに結んでゐるが、——これとて金聖歎好みの夢を以て幕を切らせて例の神韻繚渺をねらふやうかたで、同

じことを西廂記でもやつてゐることを思ひ合はせて微笑を禁じ得ないが、――上手の手から水が漏つて、飛んだ所で尻尾を出してゐる。例へば第五回に智真長老が魯達の將來を豫言する語があるが、それが七十回ではつひに見切れとんぼに終り、百廿回本の百十九回に至つて始めて實現するのだから甚だいけない。この證據一つ、以て吉本の存在を否定するに十分だ。

百回本や百二十回本はあまり長すぎるから、彼は本屋の爲に之を短かくしてやり、本の値段を廉くさせた、七十回本の流行はその爲であるといふ説があるさうだ。勿論これは甚だ淺薄皮相な俗説である。金聖歎はその卓絶した見地から、しつかと水滸傳の精神を把握し、從來の見方と全くちがつた解釋を下すに到つた。その爲には七十回以後は切り捨てざるを得ないのである。七十回以後の敘述が前半のそれに比べて著しく見劣りがするからといふやうな、單にさうしたことだけが原因ではなかつた

のである。辛島驍氏の敘述を借りよう。曰く、

「彼はたゞ、讀んで梁山泊聚義の段に至り、卷を覆ふて長歎せざるを得なかつたのではなからうか。史上の事實、水滸物語の發展の上から謂へば、百八人が梁山泊に集つて、遂に招安を受け、四方を征するに至る、それが本來の道筋である。然し彼聖歎は、百八人の者が、自づと梁山泊に集つてゆく、その徑路と個人的傳奇のうち、水滸の眞精神を讀んだのではなかつたか。廣い世をその世故に狭くして、水泊へくと、百八人が登つてゆかねばならぬ、そこに、多くの涙と考へさせられる問題を獲たのではなかつたか。一人又一人、落草してゆく徑路に、そこに水滸のもつ最も深き意味があると、知つたのではなかつたか。不純不當の社會が、純な魂を百八個まで、天涯の水泊に逐ひ込んで了ふ。さうして『彼一百八人也者、固王道之所以必誅也』である。ここに聖歎が水滸に心讀して獲た思想があり、その評に於て、讀者に鋭

く問はんと欲する命題があつたのではなかつたか。」

ここに於て、從來の水滸傳は性格的に著しき變貌をなすに至つた。梁山の忠臣義士は、今や一轉して盜賊の群と化してしまつたのである。水滸傳に冠するに「忠義」の二字を以てし、水滸傳はこの故にこそ傳ふべきであるとなす説に對して、金聖敷は全面的に反對するわけである。

李卓吾は忠義水滸傳序にいふ。「水滸傳は、發憤の作なり。……施羅二公、身は元に在るも、心は宋に在り。

元の日に生ると雖も、實は宋の事を憤る。この故に、二帝の北狩を憤りては則ち大いに遼を破れるを稱して以てその憤を洩らし、南渡の苟安を憤りては則ち方臘を滅せるを稱して以てその憤を洩らす。敢て問ふ憤を洩らす者は誰ぞや。則ち前の日水滸に嘯聚せし所の強人なり。之を忠義と謂はざらんと欲して不可なり。この故に施羅二公は水滸を傳へて、而して復た忠義を以てその傳に名づ

けぬ。」

百二十回本楊定見の「小引」にも、李卓吾の書を傳へた人と稱する袁無涯の言を引いてゐる。曰く、「水滸にして忠義なり、忠義にして水滸なり。」

百二十回本の「發凡」に云ふ。「忠義なるものは、君に事へ友と處するの善き物なり。不忠不義ならば、その人生くると雖もすでに朽ち、その言美なりと雖も傳はらず。この一百八人は、忠義の山林に聚りし者なり。この百廿回は、忠義の筆墨に見はれし者なり。之を正史に失ひて、之を稗官に求め、之を衣冠に失ひて、之を草野に求む。蓋し以て君子を動かし、小人をして亦借りて以てその私を行ふを得ざらしむ。故に李氏復た『忠義』の二字を加ふ。以あるかな。」

金聖敷は水滸傳を以て發憤の作であるのを否定し、又梁山泊の徒を以て忠臣義士となる説を全面的に否定する。

彼は「讀法」に云ふ。「大よそ本を讀む場合には、先づ作者がどんな氣持であつたかを知ることが肝要だ。たとへば史記だが、これは確かに太史公が滿腹の宿怨を發揮し出したものである。さればこそ彼は游俠傳や貨殖傳に於て、特に力をこめてをるのだ。その他の列傳の中でも、凡そ金器を揮つて人を殺すといふやうな事になると、彼は嘖々賞嘆して置かない。一部の史記は、（緩急

ハ人ノ時ニ有ル所」といふたゞこの六字、これこそ即ち彼が一生の著書の旨意であつたのである。ところが水滸傳はそれと違ふ。施耐菴には發揮せねばならぬやうな宿怨などは全然腹の中に持つてゐなかつた。たゞ飽煖無、心ものどかであつたところから、つれづれなる儘に紙を伸べ筆を弄し、題目を尋して、己が幾多の錦心繡口を寫し出したまでのこと、それ故その是非はみな聖人にもとることがないのだ。後の人がそれを知らずして、水滸の上に忠義の二字を加へ、遂に太史公が憤を發して書

を著した例に比してをるのは、とんでもない間違ひである。「偽施耐菴序にも同様の事をのべてゐる。

自序二に更に云ふ。「施耐菴、宋江を傳して、その書に題して水滸といふ。之を惡むの至り、之を迷（よ）くるの至り、ともに中國を同じうせざる也。而るに後世の何もわからぬ好亂の徒、謬りて加ふるに忠義の目を以てす。嗚呼、忠義にして水滸に在らんや。……若し忠義にして水滸に在りとせば、忠義は天下の凶物惡物なるか。且つ水滸に忠義あり、國家に忠義無きか。……故にかの忠義を以て水滸に予ふる者は、斯人必ずその君父を勲（う）むるの心あり、察せざる可からざる也。且亦、宋江等一百八人は、何の爲にして水滸に至りしかを思はざるか。その幼きや、みな豺狼虎豹の姿なり。その盛なるや、みな殺人奪貨の行なり。その後や、みな敵朴劊削の餘なり。その卒や、みな拐竿斬木の賊なり。王者の作るありて、比して之を誅せんか、則ち千人亦快しとし、萬人亦快しとす

る者なり。之を如何にしてか終に亦宋朝の斧鑕を倅免すべき。彼の一百八人にして、宋朝に倅免するを得んか、

將に若干百千萬人の、復た後世に試みんと思ふ者あらざるを保し難かるべし。耐菴之を憂ふる者り、是に於て筆を奪ひて傳を作り、題して水滸といふ。」

水滸が忠義傳でないとするれば、招安以後は當然抹殺されねばならぬわけである。かうした見地から、金聖歎は水滸傳の原文を縦横自在に改削補綴し、更に之に批注を加へてその意味を強調したのである。以下その例を擧げらる。

第六十一回、宋江は計を以て盧俊義を梁山に誘ひ寄せこれを引留めて首領の地位を譲らうとする時、彼は忠義の語を用ひる。

酒至數巡、宋江起身把盞陪話道、「夜來甚是側撞、幸望寬恕。雖然山寨窄小、不堪歇馬、員外可看忠義、宋江忠義二字、處々網羅家傑、獨不能網羅盧員外、妙筆！宋江情願讓位、

休得推却。」只一字、便令談忠、說義人驚心奪魂。頭領差矣！宋開口說忠義、員外却江口說差矣、妙絕！盧某一身無罪、薄有家私、生爲大

宋人、死爲大宋鬼！若不提起忠義兩字、今日還胡亂飲此一杯、快絕之談、足令老奸心死。若是說起忠義來時、盧某頭頸熱血、可以便灑此處！」快絕之談、足令老奸心死。

ところが「若不」以下三十七字は、百廿回本では簡單に

「寧死實難聽從」と六字あるのみである。「快絶ノ談、老奸ヲシテ心死セシムルニ足ル」と金聖歎が二度まで繰リ返して賞めてゐるのは、つまり自分の補訂した所を自贊してゐるのであつて、甚だいゝ氣なものである。大抵

「妙文」とか「妙筆」とかいつて感歎之を久しうしてゐる處を、百廿回本と参照してみると、必ずさうした補訂個處なんだから世話はない。

即ち宋江は老奸である。忠義を否定するとするれば、首領の宋江は必然的に悪奸とならざるを得ない。金聖歎によれば宋江は人物から云つても下の下であつて、かの鶏

泥棒の鼓上蚤時遷あたりに比せらるべき小人である。彼は讀法一に「水滸傳には大段正經の處あり、たゞ宋江をば

深く憎惡し、人をして之を見れば、犬彘と雖も食はざる程の恨を抱かしめる。ところが從來人は一向そのことをさとつて居らぬ。」といひ、又「水滸傳は獨り宋江を惡む、亦これその渠魁を殲ほすの意である。その餘は許してゐる。」ともいひ、第五十七回の評では「村學先

生は泥をまるめて腹となし、炭をくりぬいて眼となしてをるもんだから、水滸傳を讀んで宋江が口にする所の許多の好語を見ると、忽ち遽然として忠孝の二字を以てこの老賊に許し、甚だしきはその書端に之を冠して題目と定めたりしてをる。この點ははつきり辯じておかなければならぬ。」といつて、宋江の十大不可を列舉し、その不忠不義の盜賊たることを詳しく證明してゐる。かくて宋江のする事なす事は悉く腹黒い魂膽あつての事となし、その摘發ぶりの辛辣さは讀んでゐて膽が冷えるばかりだ。宋江の腹黒さを顯はす爲に、彼は全力を盡して餘

りだ。宋江の腹黒さを顯はす爲に、彼は全力を盡して餘さず、本文を改竄する。

例へば六十七回、晁蓋が史文恭の毒矢にあたつて死ぬ時、「史文恭を捉へた者を山寨の主とする様に」と遺言する。その後、宋江は盧俊義と兵を分つて各々曾頭市を攻めたところ史文恭は盧の捉る所となつた。百廿回本では、

宋江看了、心中一喜一怒。喜者得盧員外建功、怒者恨史文恭射殺晁天王、離人相見、分外眼睜。」

とあるが、金聖歎は之を改めて

宋江看了、心中一喜一惱。

として「喜者」以下を削去し、評して曰く、

一喜一惱、只是四字、更不分明。妙不可言。

更に評して曰く、「善く史を讀まざる者は、之を疏していはん、喜ぶとは盧員外が功を建てしを喜ぶなり、怒るとは史文恭讐人を怒るなりと。されど善く史を讀む者は

之を疏していはん、喜ぶとは玉獅子の歸り來れるを喜ぶなり、惱るとは玉麒麟の功を立てしを惱るなりと。」

右はたゞ一例にすぎぬ。金聖數は全篇を通じて宋江の誹謗をあげき、之を罵倒してやまぬ。水滸をよめば誰しも宋江吳用の權術に氣づき、殊に宋江の自謙甚だしきに過ぎ、あまりにも見えすいたやうなことを言ふのに一種の嫌味を感じる。現に李卓吾本でもその事に言及してゐる。即ち梁山泊一百單八人の人物の優劣を論ずるや、李逵を以て「梁山泊第一尊活佛」となし、之に次ぐは石秀、魯達、武松等である。而して宋江吳用に對しては之の權謀を譏り、「佛性漸滅し殆ど盡く」と評してゐる。金聖數はかうした考へを基にして、更に之を徹底的に進めて行つたまでである。その徹底を極めたところがいかにも金聖數の金聖數らしい所である。

金聖數もやはり黒旋風を第一等の人物として賞める。

天真爛漫、山泊中の一百七人、一人として彼の眼中に入

る者なし、孟子のいはゆる富貴も淫する能はず、貧賤も移す能はず、威武も屈する能はずとは、正に彼に對する好個の批語であるとなす。どんな大豪傑好漢でも、時として銀子でもつてその心を買ひウンと云はせることが出来るが、獨り李逵だけは銀子で買へぬと云つてゐる。そして面白いことには、李逵は必ず宋江の後に接して出場する。つまり作者は宋江の奸詐を痛恨するが故に、ことさら李逵の樸誠を以て之に緊接せしめ、それによつて宋江の惡を一層よく顯はすと共に、又李逵の眞率さを成したもので正にこれ一石二鳥の妙である。これを名づけて「背面鋪粉法」といふ、と金聖數は大得意で辯じてゐる。

金聖數によれば、水滸傳に用ひられてゐる文章法には、背面鋪粉法の外にも澤山ある。曰く、夾敘法、倒挿法、草蛇灰線法、大落墨法、綿針泥刺法、弄引法、獺尾法、正犯法、略犯法、極不省法、極省法、欲合故縱法、横雲斷山法、鸞膠續絃法等々。

金聖歎の改竄の例を今少し擧げて見る。彼が奇絶だの妙絶だのといつて嘖々賞賛してゐる所を目あてに李卓吾本と對照してみれば、必ず彼自身の改竄した文章なんだから、之をさがすのに少しも骨は折れぬのである。

第五回、魯知深が瓦官寺の僧を詰責する一節、

那和尚便道：「師兄請坐、聽小僧……」其語未畢 智深靜

着眼道：「備說備說。」四字氣忿如見。「……說：在先敝

寺、說字與上聽小僧本是接着成句、智深自氣忿忿在一邊夾着備說耳。章法奇絕、從古未有。十分好

個去處、田莊又廣、僧衆極多。(後略)」

百二十回本では

「聽小僧說。智深靜着眼道：「備說備說。」

那和尚道：「在先敝寺、(以下同じ)」

とあるばかり。彼はこれを夾敘法と命名して自ら大いに珍重してゐる。

これと似たやうなのが四十六回にもある。杜興が主人の李應を激する爲にいふ言葉、

「祝彪祝虎發話道：「休要惹老爺性發！把備那……」言

備那李應捉來、也解去也、却不好唐突主人名字、忽然就把備那三個字下收住、下又另盡一句禮、然後重說出來、妙筆

出神。小人本不敢盡言、實被那三個畜生無禮、」把

備那李……重說却因氣極、又說不出、只、李應捉來、也說得一李字、筆々出神入妙。李應捉來、也

做梁山泊強寇解了去！」疊一李字、便活畫出氣極後、說不出話來時

ところがこれ亦金聖歎の改竄で、百二十回本にはだゞ次の如くあるのみだ。

「祝彪祝虎發話道：「休要惹老爺性發、把備那李應捉來、也做梁山泊強寇解了去！」小人不致盡言、實被

那三個畜生無禮、把東人百般穢罵。」

第六十二回、金聖歎本に

備這與奴才做奴才的奴才！

とあり評して「凡そ十一字にして三つの奴才の字あり、妙絶快絶！」と云うてゐるが、これは百二十回本の

備這敗壞國家害百姓的賊！

といふ句に手を入れたまでである。

同回の「黒爺々」「美人一丈青」の語に評して「俗本みな之を失ひ、遂に文章をして少からず色を削がしむ。」といひ、

又同回金聖歎本には

驚得三魂失二、七魄剩一。

とあるに評して「奇語！」といへるは、百二十回本の

驚得三魂蕩々、七魄幽々。

とあるに朱を入れたのである。

六十三回、金本に

把黃信打死馬下。

とあり、評して「眞僞を言はず、つひに打死を敘す、黃信に非ざるや知るべき也。俗本訛れり。」といふ。しかし百二十回本では

把黃信打落馬下。

となつてゐるのである。大方この類である。原文を勝手に氣儘に改竄し、全く之を自家藥籠中のものとなし、さう

した上で言ひたい放題のことを言うてをる。ひどい批評家もあつたもので、これは内容外觀共に全く從來のものと面目を異にした別の一つの水滸傳といつてよい。文章はピンと張つて、些かのたるみもない。精神的には著しく近代的な深刻さを加へてゐる。これはもはや批評ではない。創作である。眞の批評は創作でなければならぬ。水滸傳は最後に金聖歎によつて作られたといつて不可はない。最もよき水滸傳は金聖歎の水滸傳であるといつて何等不可はないと私は信ずる。